

抗体 (Immunotech) 陽性細胞数を比較検討した。

〔結果および考察〕SM 法により抗原賦活化を行った標本では、他の方法に比較し、CD1a 抗原が安定して検出され、発現細胞数も明らかに多かった。SM 法による抗原賦活化は通常のパラフィン切片における CD1a 抗原の検出に大変有用であるといえる。

5. 移植肝の病理学的検討

(消化器病センター内科) 野口三四朗・
橋本悦子・谷合麻紀子・林 直諒

肝移植後には様々な病態を併発するが、その診断には肝生検による病理診断が重要で、特に rejection では病理診断が確定診断となる。今回、肝移植後肝生検を受けた32例80標本を対象に、①どのような病態が診断され、② rejection に有用な所見は何かを検討した。組織診断は cellular rejection, ductopenic rejection, 血流障害, 胆道系障害, 原疾患の再発, functional cholestasis, neutrophilic infiltrates, lymphoma, fatty liver, その他, であった。cellular rejection に特徴的な所見の出現頻度は mixed cellular portal infiltrate (89%), bile duct damage (89%), endothelitis (57%) で mixed cellular portal infiltrate と bile duct damage が有用な所見であった。また移植後の肝生検診断は多岐にわたり、いくつかの病態を併発し診断の困難な症例もあった。

6. 膵ランゲルハンス島におけるコレシストキニンの発現とその発生学的検討

(臨床生化学検査科, ¹消化器内科学, ²第一病理学)

清水京子・白鳥敬子¹・加藤陽一郎²・
渡辺伸一郎・小林楨雄²・林 直諒¹

膵ランゲルハンス島 (ラ島) の発生段階で種々の消化管ホルモンが出現することが知られている。我々はラ島におけるコレシストキニン (CCK) の発現につい

てラットを用いて検討した。免疫組織化学染色で CCK 様免疫活性は B 細胞内に局在し、逆相 HPLC で膵内の CCK の主な分子型は CCK-8であることを確認した。また、RT-PCR, in situ hybridization によりラ島内に CCK の mRNA の発現が確認された。発生学的に胎生期のラ島に CCK 様免疫活性は認められず、生後21日目頃より明らかとなった。これらの結果から、成熟期ラットの膵ラ島に CCK 産生細胞が存在することが示唆された。

7. 低血糖を引き起こした insulin-like growth factor II (IGF-II) 産生腫瘍の病理学的検討

(第二病院病院病理科, *第二内科学)

相羽元彦・肥塚直美*

big IGF-II 産生腫瘍による低血糖 (NICTH) の病理学的問題点に、① IGF-II 免疫染色の診断的意義、②しばしば腫瘍あるいは肝転移巣が巨大化してから低血糖となる理由の解明がある。

〔材料と方法〕他施設より検討する機会を得た肝細胞癌 (HCC) 6例、胃・直腸・膵癌・胸膜腫瘍・悪性線維性組織球腫・線維肉腫などの9例である。抗 IGF-II 抗体 (天野製薬) を用い ABC 法・LSAB 法で染色した。

〔結果と考察〕HCC 以外の9例は Golgi 野に IGF-II 染色性を示した。肝転移巣の発育により低血糖を来した胃癌では、原発巣でも腺管形成部の基底側 (血管側) ではなく、管腔側の細胞質 (Golgi 野) が染色され、また管腔内容物の染色性は乏しく分泌障害が示唆された。粘膜内癌も IGF-II 染色性を示し、胃癌発生初期からの IGF-II 産生性が示唆された。胃癌一般における IGF-II 染色性を見るために種々の分化度・深達度を示す胃癌50例の IGF-II 染色を行ったがいずれも陰性であった。HCC の IGF-II 染色性は乏しく、big IGF-II の Golgi 装置での M-6-P 受容体との結合と lysosome への移行・水解処理が推測された。